〔拾遺和歌集十六雜春〕おなじ御時、○天暦　梅花のもとに御いしたてさせ給て、花宴せさせ給に、殿上のをのこども、歌つかうまつりけるに、　源寛信朝臣○略歌

〔源氏物語一桐壺〕おはします殿のひんがしのひさし、ひがしむきにいしたてゝ、くわんざの御座ひきいれのおとゞの御座御前にあり、

〔内裏歌合〕天御記德四年三月卅日己巳、此日有女房歌合事者、○中略　女房又相分候、清涼殿西庇簾中第五間立倚子、便用女房侍倚子、此間上簾、

〔左經記〕寛仁元年十二月廿七日辛卯、今日攝政殿○藤原道長令上表給、仍於此座不被下宣旨、今日午刻大殿御倚子立官外記廳并南所敷御座云々、是依本家仰所敷立也、太政大臣立倚子敷座之時、已次大臣倚子座皆加此例也、

〔定家朝臣記〕康平四年十二月廿二日、依召參殿、召大外記師平大夫史孝信仰云、太政大臣○藤原頼通御倚子間事、新可作歟、可用左大臣時御倚子歟、孝信申云、去年令辭左大臣給後、有次第昇晉、立右大臣倚子之時、欲令申事由、而未被立其倚子、仍不申左右、如舊所立者、　廿四日、晩頭召道有平行於御前、被勘立御倚子日時、來廿七日丙午時午若申　召大外記師平下給之、入道殿御時、(後一條寛仁元年十二月廿五日、召文義給之也、)次召左中弁資仲朝臣、裝束使於御前被仰可造御倚子雜物可召事、今日成左大臣宣旨所司云々　今朝爲御使參左府、○藤原教通令聞云、忠仁、○藤原良房昭宣、○藤原基經貞信、○藤原忠平清愼公、○藤原實頼先以上表而後令立倚子、而故入道殿先立倚子、次被上表、可隨何例哉、返報云、上代例、理雖可然、寛仁例、尙可爲規摸、況當年首不可空御座者、

〔台記〕保延二年十月十六日庚戌、今日予○藤原頼長著座之後、始參政日也、○中略　次予出小屋、左兵衞督○宗輔大貳○實光等、廳西庇內列立、北面次予出小屋南向ニ立テ相揖、入從北西中戸、著倚子、從座下方、著之、如恒、次左兵衞督、大貳等著倚子、此間予見扇次第、

〔兵範記〕仁安三年二月十九日壬子、今日可有御讓位事、○六條中略、